

2023年12月17日 久宝教会 第3アドヴェント礼拝メッセージ

「御子の生まれるところ」

牛田匡牧師

聖書 マラキ書 3章 19-24節

待降節(アドヴェント)の第3週目となり、クランツのろうそくにも3つ目の火が灯り、いよいよクリスマスまで後1週間となりました。昨日も幾つもの保育園でのクリスマス礼拝がありましたし、あちこちでクリスマスの行事が行われ、町の中でもクリスマスの音楽が流されています。陽が沈むのがすっかり早くなりましたが、夜にはあちこちでイルミネーションが華やかに点灯しています。子どもたちはサンタクロースにプレゼントをお願いしたりして、何だかワクワクするような、嬉しくなるような、そんな季節です。

そんな季節に多くの教会では、「クリスマスには教会で、『本当のクリスマス』を過ごしましょう」と宣伝しているのではないかと思います。確かに日本では、クリスマスという日がそもそも何をお祝いしている日なのかが知られていないまま、いわゆる商業主義に載せられて、利用されているようにも思います。ですから、そのような現実に対して、「主役が不在の誕生日パーティー」と揶揄されることもあります。しかし、その一方で、教会でイエス・キリストの誕生を記念する「本当のクリスマス」をお祝いしようと言う時、果たしてそれは「本当のクリスマス」なのでしょう。どうでしょうか。今から2000年以上も前に、神の子、御子が生まれたところとは、一体どのようなところだったのか……。世界中で格差が拡大し、憎しみの連鎖が生じ、戦争が終わらない今、その問いが私たちに改めて問いかけられているように感じています。

今回の聖書の言葉は、ヘブライ語聖書の「マラキ書」の言葉でした。紀元前5世紀頃の預言の言葉と考えられていますが、ペルシア帝国に支配されている中で、自分たちの拠り所であるはずのモーセの律法も、神殿での祭儀も軽んじられ、宗教指導者たちも腐敗し、正しい人たちが馬鹿を見るような時代背景、社会状況だったようです。バビロニアに支配されている時には、「バビロニアから解放されたら救われるはずだ」と言っていたのにも拘わらず、実際にそうなってみてもあまり生活は目に見えて良くなる。その次には「エルサレムに神殿が再建されたら、今度こそ自分たちは救われるはずだ」と思っていたのにも拘わらず、再建が終わってそのお祝いムードが去ると、何だか満たされていない現実がある。自分たちを導き出してくれた神様にではなく、実質の支配者であるペルシア帝国の顔色ばかりを窺って暮らしている現実がある……。そのように、何が正しいことなのか、守るべき

ものなのか、その価値基準が揺らぎ、乱れ、拠り所となるもの、立ち返るべき所が見失われつつありました。預言者はその中で、人々に来るべき「裁き／審判の日」のことを告げました。

「主の日」とも言われている裁きの日には、傲慢な者や悪を行う者は、かまどにくべられる藁のように、全て火で焼き尽くされると言われています(19)。その一方で、じっと耐え忍んで来ていた神を敬う正しい人たち、「わが名を畏れるあなたがた」は、報われる。これまで受けて来た傷や、ひどい仕打ちが「義の太陽」によって癒されると言われています(20)。しかし、この預言の言葉の一番の目的は、善人に報い、悪人を滅ぼすというような、単純な二分法ではなく、最後の23-24節にあるように、この地上が滅ぼし尽くされないように、恐るべき主の日が来る前に、預言者エリヤが遣わされて、人々の心を父に向けさせる、というものでした。ここで言われている預言者エリヤには、生きたまま火の戦車によって天に昇って行ったという伝説(列王記下2章)があったために、古くから再びこの地上にやって来ると考えられていたようです(シラ書48:10)。そして、このマラキ書の時代から更に500年ほど後の福音書の時代には、イエス様が活動されるよりも先に活動していた「洗礼者ヨハネ」が、その再来したエリヤだと人々に理解されるようになっていました(マタイ17:12-13)。

この世界の全てを創られた神様は、そのお造りになった世界を滅ぼし尽くされることを望まれるはずがありません。裁きの預言とは、破壊の予告ではなく、救いと解放の予告です。現実がどれだけ停滞して混迷し、希望を持つことが出来ず、諦めるしかないような状況でも、それでも必ず救いが来るという確信。それこそがこの預言の言葉でした。そしてその裁き／救いの約束は、クリスマスに人間の赤ちゃんとして生まれたイエス・キリストとして、この地上にやって来られました。しかも、天の神の力で、空から地上を焼き尽くす火を降らせ、悪という悪を滅ぼし尽くすような方法ではなく、そのような強大な力とは正反対の、全くの無力な姿で、他人からお世話されないと生きていくことのできないような赤ちゃんとして、救い主は生まれて来ました。

クリスマスに生まれたイエス様はまた、「闇の中に輝く光」(ヨハネ1:5)とも言われています。夜空に星の光が美しく見えるのは、背景となる空が暗いからです。周りを見回した時、あたり一面まっ暗闇しかないように見えても、実はそこにも小さな光がある……。イエス様がお生まれになったのは、地上の王、権力者たちが暮らすお城でも、お屋敷でもなく、宿屋でもありませんでした(ルカ2:7-8)。そのこと

が私たちに伝えていることは、救い主は私たちが予想だにできなかった場所に、予期しなかった形で、もう既に来ている、そして私たちからお世話されることを待っているということなのかもしれません。

ウクライナでも、パレスチナでも一向に争いが止まず、戦争が続けられています。この同じ地球の中でクリスマスを待ち望み、期待に心躍らせている豊かな人たちがいる一方で、今日の命をつなぐ食べ物にも、横たわる場所にも事欠く人たちがいます。大切な仲間や家族を失い、生きる希望を見出せなくなっている人たちもいます。今、絶望の中にいる人たちにとっては、一刻も早く「裁きが来てほしい、救いが来てほしい」という願いが切実なものでしょう。しかし、聖書が繰り返し述べているのは、「いつか来る神、やがて来る神」と「もう既に来ている神、いつも共にいる神」は同じだということです。

深い悲しみや絶望のただ中にある時、共にいてくれて、働きかけてくれるという神の存在など、全く感じられないという時も、確かにあるでしょう。全く神の存在を感じられず、神から見放され、見捨てられたように感じてしまう時もある。その一方で、深い暗闇の中にあっても、小さな光が灯されたと感じて、神様が隣にいてくれると感じることが出来る時もあるのではないかと思います。そのどちらが良いとか悪いとか、優れているとか劣っているとか、信仰が薄いとか篤いとか、そのようなことは誰も決して言うことは出来ません。同じ一人の人であっても、時と場合によってその気持ちは大きく揺れ動くのは当たり前のことです。

目に見えない神が、目に見える形として、肉体を持った人間として生まれて来たということ。そして「私に従いなさい」と言われたこと。それは、私たちもまたイエス様の言葉と振る舞いに従って歩むように招かれているということであり、また私たちの手を通して、この世界に神様の働きが表されて行くということなのではないかと思います。御子の生まれる所、それは 2000 年前のパレスチナであるだけでなく、現代の紛争地域、破壊と飢餓と貧困にあえぐ地域でもあり、また「今ここ」でもあります。「インマヌエル(私たちと共におられる神)」とも呼ばれるイエス様(マタイ 1:23)が、今も確かに共にいてくださるということに信頼して、今ここから私たちに出来ることを、誠実に努めて行きたいと願います。この世界を癒やす義の太陽の熱、お日様のぬくもりを隣の人と一緒に分かち合っていく歩みへと、私たちは今日もここから導かれていきます。